
魔法少女リリカルなのはvivid ~ 魔法学院の魔力無し ~

スラりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid〜魔法学院の魔力無し〜

【Nコード】

N8476Z

【作者名】

スラりん

【あらすじ】

St・ヒルデ魔法学院に入学した隼人。

そんな彼も9年が過ぎてもう今年で中等科三年生になる。

しかし魔力量が全く上がらない！

そんな魔力無しの彼に様々な出来事が降りかかる！！

魔法少女リリカルなのはvivid〜魔法学院の魔力無し〜始まります！！

vivid1話(前書き)

はじめまして！

このたび執筆をさせていただくスラりんです。

初心者のため読みにくい文章になってしまつと思ひますが、
これからよろしく願ひします。

vivid1話

一人の少年が学校の廊下を歩いていた。

憂鬱だあ。

歩きながらその少年はそんなことを考えていた。

「いつもの事か・・・。」

少年は教室へと続く廊下を歩いて行った。

そんな少年の名前は黒羽隼人。

ちなみに憂鬱な理由は彼がこの学園で劣等生の部類に入るからである。

劣等生と思う理由は上がらない魔力量だ。

もうずっと前の初等科から魔力が一向に上がらないのだ。

それに対して彼は常時、劣等感を抱いている。

それに見合う特技を持っているのだが。

ちなみに彼には話しかけてくる生徒があまりいない。

別に劣等生だからいじめられているというわけではない。

第一、この学校では上位成績者以外は成績の公開などはしないのでそれを知られることは少ない。

また、この学校ではそういうことに関しては厳しい。

この前もだれか一人が長時間延々と指導を受けているのを見たことがある。

ただ単に隼人は人と話したりするのが苦手なのだ。

ある程度親しくなった人なら話すこともできるが、新しい友達というものをなかなか作れない。

そんな友達の少なさも彼の憂鬱に拍車をかけていた。

しばらく歩いた隼人は一つの部屋の前で立ち止まる。

そしていつもの癖なのか看板を確認する。

3年 組、隼人のクラスだ。

「今日は何か面白いことでも起こるかな……。」

そう言いつつ、隼人は教室に入って行った。

vivid1話(後書き)

少し短かった気がします・・・。

次はもう少し長くしようと思います。

最後まで読んでいただきありがとうございます！

次回もよろしく願います！それでは！

vivid主人公紹介（前書き）

今日ユーザを見たらお気に入り登録が・・・！！

ありがとうございます！

これからもよろしく願います！

今回は主人公紹介です！

vivid主人公紹介

名前 黒羽 隼人

年齢 15歳

身長 168cm

体重 58kg

容姿 黒髪黒瞳。体型は平均より少しがっしりしている程度。

趣味 学校の屋上で昼寝をすること。図書館に行つて本を読むこと。

備考 St・ヒルデ魔法学院の中等科3年生。

魔力量がほぼ皆無の魔法学院の劣等生。

魔力量は、バリアジャケットを纏い、それをしばらく維持するだけで精一杯という程度。

必要以上のことはあまり喋らないが、相手が親しいだと普通に喋る。

また、そんな言動と中学生離れしている雰囲気からよく高校生などと間違われる。

最近の悩みは友達が少ないことと魔力が全然増えないこと。

黒ノ流体術で氣を扱うことができ、魔法の代わりに氣を使う。

vivid主人公紹介（後書き）

。 一回目の紹介なので、何とも微妙な紹介になってしまいました・・・
回を追うごとにしっかりと設定は記していくつもりです。
それでは！

vivid2話(前書き)

vivid2話です。

明日から少し忙しくなるので今日何とか投稿できてよかったです。

前回よりも長くなりました。

どこか誤字などがありましたら指摘等をお願いします。

vivid2話

今年のクラスに緊張する・・・なんてことはなく、隼人は普通にドアを開けた。

ガラガラガラ

隼人が扉を開けると、入口付近にいた数人の生徒が静かになった。しかし、隼人が自分の机に向かうとまた何事もなかったかのように話を始めた。

「よう、おはよう隼人。」

そんな隼人に声を掛けるものが一人。

「ああ、おはよう健二、お前同じクラスだったんだな。まあ、今年もよろしく・・・どうしたんだ？随分、機嫌が良いみたいだけど。」
「ああ、聞いてくれよ。今日、たまたま中等科に来る途中で初等科に向かうヴィヴィオちゃん達見かけてさ。いやゝ運がよかった。やっぱあの三人は可愛いなあ。」

隼人に声をかけた少年、吉岡健二は隼人がこの学園で気兼ねなく話をする事ができる数少ない友人のうちの一人だ。

健二は顔はいいのだが考えることが一般中等生と比べ残念すぎる。そして年下絶対主義。別に年下好きなのが悪いわけではないのだが・・・。いわゆる残念イケメンだ。

ちなみに中等科一年からの知り合いでそこからずっと同じクラスである。

そんな残念イケメンこと健二は今朝のラッキーについて語り始める。

「ヴィヴィオ？」

「知らないのか？初等科四年生の女の子。そのくせあの歳で魔力保有量が俺達の何倍もあるんだぜ。ホントすげえよなあ。」

「俺の場合は比べること自体がおこがましいけどね。」

「お前、魔力スツカラカンだもんな。」

「ハッキリというなよ、オイ。」

そうやって隼人は健二をジト目で見つめる。

しかし、健二はどこ吹く風といった様子で話を続けた。

「けど俺もあんな可愛い彼女欲しいなあ。どっかにいないかなあ、優しくて可愛い子。」

「何言ってるんだよお前……。というか、まずその考えをもう少しマシにしたらどうだ？そうすればきつとお前ならモテる……。と思う。」

健二の発言に隼人はため息をついて答えた。

「隼人、お前なら知ってるんじゃないか？お前だって顔は悪くないから一人や二人ぐらい知り合いの中にいるだろ。」

「悪くないって何なんだよ……。それに、俺にそんなのいるわけないだろ。こんな魔力なしに興味持った人なんていないよ。」

「そっかあ 『ガラガラガラガラ』。やべッ、先生が来た。んじゃない後でな。」

「ああ、居眠りするなよ。」

「ははっ、そりゃこっちのセリフだ。」

そうやって健二は自分の席に戻っていった。

隼人も自分の席で今日の授業の用意をすると、ありがたい先生の話
を横流しにして聞き始めた。

時間経過

隼人はあれから無事に授業を終えて、今はヒルデ魔法学院の近くの
図書館に来ていた。

図書館に入ると司書であろう女性が貸出一覧に目を通していた。

「高橋さん、失礼します。」

「あら、いらつしやい隼人君。今日は何の本を探してるの？」

「いえ、今日はただ適当に読みにいただけなので……。お心遣い
感謝します。」

「どういたしまして。それじゃあ、ゆっくりして行ってね。」

そういって、女性はまた貸出一覧に目を戻した。

今の会話の通りこの人、高橋香織も隼人が相談などをすることがで
きる数少ない人物のうちの一人である。

「さて、じゃあ今日はこれにするか……。」

そうやって隼人は近くの本棚に入っていた一冊の本を取り出した。

「遠距離の砲撃魔法・・・ね。確かに参考にはなるけど、魔力がスツカラカンの俺じゃあこれはとてもじゃないけど無理だろうな。管理局のエースの高町なのはさんとかになると普通にできるんだろうけど。」

本を読み終わった隼人はそう批評を下しつつ、本を元の場所に戻した。

「ちょっと外れ引いちゃったか。とりあえずもう今日は帰」「ヴィヴィオー、待ってー。」

・・・何だあれは？」

帰ろうと席を立った隼人に少女のものと思われる声が聞こえてきた。

「こらっ、リオ！駄目だよ、静かにしなきゃ。他の人の迷惑になるでしょう。」

「だって〜ヴィヴィオが私たち置いて先に行っちゃうから。」

「うっ、それはちょっと・・・。」

そこには三人の初等科と思われし子たちがいた。

隼人は金色の髪の少女がヴィヴィオと呼ばれていたことから健二の言っていた子たちだろうと予測した。

「大丈夫よ。今のこの時間に使う人なんてほとんどいないから。今、ここにいるのは彼ぐらいじゃないかしら？」

図書室の司書である香織は三人にそう言って、隼人の方を指さしてきた。

それにつられて三人も隼人の方を向いた。

急に注目を浴びたので隼人は少し驚いた。

しかし、三人に軽く会釈して帰る為に出口へ向かった。

「……………隼人さん？」

「え…………？」

隼人は名前を呼ばれた事に対して足を止め、呼び主の方に振り向くと金色の髪をした少女、ヴィヴィオ（他二人にそう呼ばれていたから）がこちらに走り寄って来た。

「どうかしたのヴィヴィオ？もしかして知り合いの方？」

「へ〜、ヴィヴィオに年上の知り合い、しかも男の人ねえ〜。」

ヴィヴィオにつられてツインテールのお嬢様といった感じの少女と、ショートヘアと八重歯が特徴のボーイッシュさを感じさせる少女の二人も寄って来た。

しかし隼人は三人全員はおろか、声を掛けてきたヴィヴィオすら会った覚えというか記憶がなかった。

……………昔はあったのかもしれないが。

とりあえず隼人は正直に分からない風に聞いてみた。

「えっと、悪いんだけどこっちはそっちのことをあまり知らないんだけど……。」

「えっ!?!?……覚えていませんか?」

「えっと……。」

「そう、ですか。……なら仕方ないですね。私、初等科四年生のヴィヴィオです。」

予想通りヴィヴィオは一瞬悲しそうな顔をしたがすぐに元の笑顔に戻って自己紹介をした。

しかし、隼人は先ほどの顔がどうしても印象に残った。

「(今のは……)……ああ、俺は中等科二年の黒羽隼人だ。」

「私は初等科四年コロナ・ティミルです。」

「わたしはリオ・ヴェズリ って言います!! 同じく初等科四年ヴィヴィオの友達です!」

「ヴィヴィオにコロナにリオね。それじゃあ、俺は用事があるからもう行くよ。」

とりあえず今は考えても仕方ない。

そう考えた隼人は「じゃあ。」と一言言って隼人は出口から出ていった。

「結構大人っぽかったね。正直ホントに中学生か疑っちゃった。」

「同感。雰囲気なんか……ってヴィヴィオ?」

二人はさっきの自己紹介依頼黙っているヴィヴィオに目を向けた。その本人はどこか残念そうな顔をして、隼人が出て行った出口を見ている。

「忘れちゃったのかなあ、あの時のお礼……まだ言っていなかったんだけどなあ。」

「……? ? ? ? ?」

ヴィヴィオ達がそんな会話をしているとき、隼人もひとり呟いていた。

「あの子、結局思い出すことは出来なかったけどどこか懐かしい感じがしたな……。」

ひよっとしたら『アレ』の前に会っていたのかもしれない……。

「

そんな隼人の呟きは誰かに聞こえることもなく消えていった。

vivid2話(後書き)

ようやく原作キャラを出せました。

隼人とヴィヴィオに過去に何があったのか・・・。

このペースだと漫画一冊終わるのにかなりかかりそうです(汗)

とりあえず、これからも頑張ります!!

それでは!

vivid3話(前書き)

あけましておめでとうございます。

ちよつと実家帰りしてきました。

餅が美味しかったです(*　　)

第三話です。どうぞ！

vivid3話

ヴィヴィオ達と別れた隼人は、今日の夕食の準備をすべくスーパーに向かっていた。

「いらっしやーい、今日は卵が2パックで150円だよ。」

「ん、卵が安いな。卵も買っておくか。」

スーパーの客の呼び込みさんが卵の特売を知らせていたので、隼人は今日の夕御飯に必要な物を買いつつ卵売り場に向かった。

「えーつと、人参、玉ねぎ、ジャガイモに・・・後は牛肉つと。」

この材料から察するに黒羽家の晩御飯はカレーだろうか？

隼人は夕食の材料を手早く買い物かごに入れると、今日の目玉の卵を買うべく卵売り場に向かった。

向かった先には普段はいないはずの健二の姿があった。

「あれ？健二じゃないか。お前も買いたしなのか？」

「んあ？ああ、隼人か。・・・親が買い出しぐらい行けって言ってきたなあ。」

ちくしょう！ゲームの途中だったのにぶち切りされたよ。レウス追いつめるの苦労したんだぞ！！」

「ああ、モンファンか・・・。」

どうやら健二は今話題のゲーム【モンスター・ファンタジー・ポータル】、略してモンファンをやっているみたいだ。

「でも、3DSだと画面が小さいから結構ガンナにはきついんだよなあ。やりごたえはあるけど……、ほらっ、どうせ卵買いに来たんだろ。」

「新機能とかもついてるらしいな……ん、サンキユ。」

モンファンの話をしつつ、隼人は健二から受け取った卵をかごの中に入れていく。

「ああ、そういえば今日お前が言ってたヴィヴィオって子に会ったよ。」

「えっ!? マジで!! なんてこと喋ったの!! 俺の事とか紹介していてくれた!?!」

「なんだそれ。たまたま図書館であって自己紹介しただけだよ。」

「なんだ〜、でも俺も図書館行つとけばよかったあ。」

健二の女の子好き発現に隼人は呆れてため息をついた。

そんなこともしつつ、二人はレジを済ませて出口に向かっていた。

「お前、たまには手伝いしろよ?」

「うるせえ。俺は変な方向に時間をつぎ込みたいんだ!!」

「その努力を別方向に活かせばいいのに……。」

「無駄に洗練された無駄のない無駄な目的のために動くツ!! それが俺だ!!」

「それ結局無駄じゃん……。」

「ほつとけ!!……おっと、俺こつちだから。」

「ああ、じゃあまた明日。」

「おう。」

隼人と健二は家の方向が正反対なので、スーパーを出ると二人は反対に歩いて行った。

健二と別れた隼人は家を目指してゆったりと歩く。

「健二のあの癖は直らないのだろうか……。」

帰り道、隼人は自分の数少ない友人の将来を心配した。しかし、今それを考えても仕方がないと思った隼人はとりあえず晩御飯を作ることにした。

「今日はカレーを作るか……。」

……カレーは当たっていたようだ。

「御馳走さまでした……。」

隼人の言葉に答える者はいない。

今の隼人は家族がいなく、一人暮らし状態である。

隼人の両親はとある事故で亡くなり、唯一残った妹も親戚に連れて行かれ、隼人はアパートで一人暮らしをしている。

あの時の妹の泣き顔は今でも忘れることができない。

ちなみに隼人は卒業したら管理局に入ろうと思っている。

魔法学院を卒業し、管理局に入ったら定期的な収入も入る。そして妹も返してもらうつもりだ。

親戚の人もそれを了承してるし、今でもたまたま妹に会わせてくれている。

そのためにも、まずは魔力なしで十分に戦えるようにならなくてはいけない。

「練習しに行くか・・・。」

今は亡き父から教わった自分の数少ない特技である氣を練習するために隼人は市内の公共魔法練習場に向かった。

「・・・そういえばあそこって魔法以外の使用ってよかったのか？」
もう何回も使用しているのに今更そんな事を呟きだしながら隼人は夜の道を歩く。
市内の公共魔法練習場、よく健二達と魔法の練習（隼人はそれ以外）をするときに使っている。
噂によると、結構この魔法世界で有名になっているような人でも使っている人はいるらしい。

そんなところで魔法以外の氣を使えない人から見たら未知の力となるようなものの練習をしてもいいものなのかと今更ながら隼人は心配になってきたのだ。

しかし、

「まあ、いざとなればどうとでもなるだろう。」

隼人は意外にも楽観的主義者に近い答えを出しながら、夜道を歩いていく。

「ふう……よし!!」

練習場に着いて軽く準備運動をする。

その後、構えを取った隼人はいつも通り架空の敵を想像した。最初は対人戦（仮）である。架空の敵はその場で軽く準備運動をすると、隼人にかかって来た。

「（右肩、左腕、首元、腹）……ふっ、はっ、やっ、たっ。」

敵からの連撃を隼人はその場からあまり動かず、最小限の動きでかわしていく。

隼人は魔力が圧倒的に少ない、というよりない。

だから最小限の動きで動き、できる限り体力の減りをなくすようにしている。

相手の注意を自分に向けるように、なおかつ自分は傷を負わない動きだ。

普通ならばこんなことをすると失敗した時に大変なことになるが、彼の場合は気によって相手の呼吸を読み、それに対処するように動くため、まず接近戦での攻撃は当たらない。

また、隼人の戦い方は攻めるを目的としたものではないため、自然とこのような形になった。

守って隙があれば攻撃、完璧なカウンター戦法だ。

すると、最後の1撃に勢いをつけすぎたのか敵は少し前のめりになる。

「（ん！隙ができた！！今！！）ハアツ！！」

その隙を逃さず隼人は連撃を叩き込んだ。

前のめりになった敵の腹に膝打ち、

その後、まだ体勢を整えきれない敵の顎にアッパーを打ち、最後に回し蹴りを叩き込む。

「せいっ！！」

仮想の敵はそのまま吹っ飛んで動かなくなる。

アッパーで脳髓を揺さぶったのでしばらくは立ち上がれないはずだ。そう思った隼人は、対人訓練（仮想）をやめる。

ちなみにさっきのレベルは準備運動程度に設定されている。

対人訓練を終えた隼人は次の一つ一つの動きの訓練を始めた。

隼人の訓練は基本 対人 一つの動き 対人 一つの動き・・・といった感じで進んでいく。そして最後に氣を使った応用練習もする。これが一日の基本的な流れだ。

「（本当は仮想じゃなくて実際に手合わせとかしたいんだけど・・・）」

健二などとも偶に対戦はするが、そのうち慣れができてしまう。
かと言って隼人には他に対戦相手はあまりいない。
隼人は新しい対戦相手を望んでいた。

「はあ、どっか身近にいい対戦相手いなかなあ……。」

そんな事を考えながら隼人の訓練は進んでいった。

vivid3話(後書き)

書きながら駅伝を見ていました。

日進食品の優勝でした！速かったですね。

皆さんすごく頑張っていて、私も勉強を頑張らなければなあと思いました。

皆さんが今年、充実した年を迎えられますように……。
それでは！

お知らせ 再開

スラりんです！！

感想を読ませていただいたところ、さすがに投稿後この期間で終わるのは皆さんに失礼だと思い、まことに優柔不断ながら受験勉強の間にとり形で投稿を継続させていただかせてもらうことにしました。

うだうだと決断に悩んでしまうダメな作者ではありますが、これからもお付き合いをどうぞよろしく願います。

というわけで誠に申し訳ありませんが、再び執筆させていただきます。

魔法少女リリカルなのは〜魔法学院の魔力無し〜再開です！！

vivid4話(前書き)

再開いたしました、スラりんです。

時間ができたので書かせていただきました。

それにしても他の作者さんは文章の構成が上手でうらやましいです。

休憩中などに小説を手に書き方を勉強しています……。

それではどうぞ！

vivid4話

「……………よし。今日はこんなところか。」

最後の氣の練習も終わった隼人はクールダウンを始める。

時刻は午後の8時ほど。

隼人の夕食は早いのでそれにつれて訓練も自然と早く終わる。

《毎日早めの同じ時間に少きついでぐらいの訓練を》が隼人のモットーである。

時間がバラバラだと成長速度が遅くなるし、体に負担をかけすぎずにそれでも成長が望める限界までは訓練した方がいいからだ。

早めという所に関しては気にしないでほしい。

そんな感じで練習を終わろうとした彼は多大な魔力を視界の端に視認した。

「あれは!?!」

察知では無く『視た』、膨大な魔力の持ち主を。

これも彼の特技のうちの一つである。

特技というよりも特異体質、レアスキルと言った方がいいかもしれ

ない
彼はある日突然、他人の魔力や術式を『視る』ことができるようになった。そんなことを軽々しく言おうものならばどこの実験動物にされるか分かったものではない。

隼人の視線の先には金色の髪をした女性と茶髪の女性が並んで歩いていた。

「どちらからも膨大な魔力を感じる……って、あれヴィヴィオか？全然身長とか違うけど……。」

隼人は金色の髪の女性から昼間出会った後輩から全く同じ魔力を感じた。

そして彼女の魔力光は虹色だった。今日の先にいる子の魔力光も虹色。

虹色の魔力光は珍しい、というか隼人は初めて見た魔力光なので間違えることもないと彼は思った。

「……ということは、変身魔法かなんかの類か？」

彼がそんな風に呟いていると視線の先の茶髪の女性と目が合った。続いて金色の髪の子の方……びっくりしている。

「やっぱりか……。」

隼人は溜息をついた。

反応の仕方で大體分かる。
すると、十中八九ヴィヴィオだと思われる女性が近づいてくる。

「隼人さん！！隼人さんもここでトレ―ニングしてたんですか？良かったらこの後一緒にトレ―ニングを」

ヴィヴィオ（？）が話しかけてくる。

自分の名前を知っているからもう確定事項だが、『視る事』^{コト}を知られてはまずい。

そう思った隼人はとぼけることにした。

「え？初めまして……………ですよ？」

隼人がそう答えると彼女は数回瞬きした後、自分の姿を見直すこと数秒後……………慌てて変身魔法を解いた。

「え……………あ！！！！すみません！これはさっき使っちゃって忘れてました。」

「ああ！！ヴィヴィオだったのか！（…………やはり変身魔法か。けど変身魔法、しかも大人になる術式なんて初等科四年のレベルじゃないな。」

「どうしたの、ヴィヴィオ？急に走り出して…………、この子は知り合い？」

隼人とヴィヴィオがそんなやり取りをしていると茶髪の女性の方が二人に近づいて話しかけてきた。

隼人が知る限りはこの女性に会ったことはない。

「あなたは……………？」

「隼人さんは初めましてですね。紹介します、こちら高町なのはさん。わたしのママです。」

「君が隼人君だったんだね。ヴィヴィオから色々聞いてるよ、よろしくね。」

茶髪の女性、なのはは人懐っこい笑みを浮かべて挨拶してきた。もちろん、隼人もそれに返す。

「黒羽隼人です。初めまして、・・・ところで今日初めて会ったのに話すことなんてあったんですか？（というよりもヴィヴィオのお母さんってなのはさんだったのか！？・・・まあ、それは今度聞こう。）」

ヴィヴィオの母親が長年、自分が入りたがっていた管理局のエースだった事に驚愕した隼人だったが、それについてはまあ別の機会に聞くことにした。

そして、なぜ会ったばかりのはずのヴィヴィオが自分の話をしているのが気になったので隼人は聞いてみることにした。

「えっ！？ヴィヴィオからは「わ　　っ、駄目

！！！」どうしたのヴィヴィオ！？」

「気にしないでママ！！隼人さんも！！」

「あ、ああ分かった。」

しかし、質問は突如ヴィヴィオの乱入によって妨げられた。

ヴィヴィオの剣幕に押され、引き下がった隼人は別の質問をすることにした。

「ところで、ヴィヴィオ。俺になんか言おうとしていたけど。」

「あ、そうだ！！私この後、魔法の練習するんですけど隼人さんも

「一緒にどうですか？」

「あ・・・俺もう終わる所だったからちよつと無理なんだ。・・・ごめんね。」

どうやらヴィヴィオもここに魔法の練習に来たみたいだ。

なのははその付き合いでよかったらしい。

しかし隼人の練習はもう終わっているので隼人はその誘いをやんわりと断った。

するとヴィヴィオはやっぱり残念そうな顔をしたが、すぐに何か思いついたのか別の事を言った。

「そうですかあ。（なんか都合合わないなあ・・・。そうだ！！）

・・・あ！明日、私知り合いと第四区公民館でストライクアーツの練習するんです！隼人さんも一緒にどうですか？」

「えっ！？それってヴィヴィオの知り合いばかりでやるんだろ？いいのか、俺がお邪魔しちゃっても？」

「大丈夫です！！皆、優しい人たちばかりですから！それに皆さんすっごく強いんですよ！」

ヴィヴィオの提案は明日、知人とストライクアーツの練習をやるので一緒にどうかというものだった。

正直、いきなり部外者が行っていいものかと心苦しい所だったが、別に行ってもいいみたいで何より新しい対戦相手ができるので隼人にとっては嬉しい誘いだった。

あまり断るのはかえって失礼になる。

そう判断した隼人はその誘いを受けることにした。

「そうか・・・？なら・・・行かせてもらおうかな？」

隼人がそう言うとヴィヴィオは嬉しそうに時刻や持ち物などを説明

し始めた。
隼人はさっきの今で対戦相手ができるという願いがかなえられたこと
に内心苦笑気味であった。

遊ぶ約束をする友達同士のような姿。

なのははそんな様子を嬉しそうに見つめていた。

こうして黒羽隼人と高町親子の邂逅は過ぎていった。

「ヴィヴィオ、彼あの時の事覚えてないみたいだったけどよかったの？」
「うん、今はまだ言いんだ。多分、何か理由があるんだと思う。それに、これから言える時が来ると思うから、その時ちゃんと『ありがとう。』って言っつもり。」

彼、黒羽隼人と別れた高町親子は魔法の練習をしながら話していた。

「そう。ヴィヴィオが決めた事なら私は何も言わないの。」

なのはは自分の娘がよく話してくれた少年、隼人がヴィヴィオのことを忘れていたのに少し心配しつつ、ヴィヴィオがそこまで落ち込んでるわけでもなかったので安心した。そして少しからかいたい気分になった。

「ところでヴィヴィオ。」

「何〜〜〜?」

なのはは明日の為に魔法の練習をしている娘に向かっていった。

「ヴィヴィオって隼人君の事どう思ってるの?」

直後、バランスを崩して転ぶ音が広場に響いた。

「だ、大丈夫ヴィヴィオ?」

「な、何言ってるのなのはママノノノノ!!隼人さんはそうゆうのじゃ……。」

「へ?私はヴィヴィオから隼人君についてあの時のことしか聞いてないからそれ以外のことを聞こうと思ったんだけど……、どうしたの?」

なのはが頭に?マークを浮かべているのを見てようやくヴィヴィオは理解した。

母はただ純粹に聞いただけでたまたま、ああいう聞き方になっただ

けだという事に。

「さすが・・・、ユーノさんの気持ちに気付かなかっただけある・・・。」

「へ？ユーノ君はお友達だよ？」

自分に好意を抱いている相手を本気で友達で済ませる天然？つぷりにヴィヴィオは溜息をつきながら答えた。

「はあ・・・隼人さんは優しい人だよ。学校の先輩。」

「ふうん、分かった。『ピリリ、ピリリ』ん、ちよつとごめんね。」

なのはが納得したところで彼女の携帯端末機がなり、彼女は練習場を出て話しにいった。

その後ろ姿を見送ってからヴィヴィオは練習を再開した。

「隼人さんは優しい人で私の恩人。それ以外の感情はないよ。」

そう吹きながら練習をしたが、結局なのはが戻ってきて練習が終わりきるまでの間、どうにも集中ができなかった。

vivid4話(後書き)

感想を送ってくださいている方々、ありがとうございます。

連載を続けていく中でとても支えとなっております！

他の方々も誤字脱字の指摘なども一緒によろしくお願いいたします。
それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8476z/>

魔法少女リリカルなのはvivid～魔法学院の魔力無し～

2012年1月6日22時51分発行